

さまよえる猶太人

芥川龍之介

青空文庫

キリスト 基督教国にはどこにでも、「さまよえる猶太人ゆだやじん」の伝説が残っている。伊太利イタリイでも、仏蘭西フランスでも、英吉利イギリスでも、独逸ドイツでも、オウスタリ 奥太利でも、スペイン 西班牙でも、この口碑が伝わっていない国は、ほとんど一つもない。従つて、古来これを題材にした、芸術上の作品も、沢山ある。グスタヴ・ドオレの画は勿論、ユウジアン・スウもドクタア・クロリイも、これを小説にした。モンク・ルイズのあの名高い小説の中にも、ルシファヤ「血をしたたらす尼」と共に「さまよえる猶太人」が出て来たように記憶する。最近では、フィオナ・マクレオドと称したウイリアム・シヤアプが、これを材料にして、何とか云う短篇を書いた。

では「さまよえる猶太人^{ゆだやじん}」とは何かと云うと、これはイエス・クリストの呪^{のろい}を負つて、最後の審判の来る日を待ちながら、永久に漂浪を続けている猶太人の事である。名は記録によつて一定しない。あるいはカルタフィルスと云い、あるいはアハスフェルスと云い、あるいはブタデウスと云い、あるいはまたイサク・ラクエテムと云っている。その上、職業もやはり、記録によつてちがう。イエルサレムにあるサンヘドリムの門番だつたと云うものもあれば、いやピラトの下^{したやく}役だつたと云うものもある。中にはまた、靴屋だと云っているものもあつた。が、呪^{のろい}を負うようになつた原因については、大体どの記録も変りはない。彼は、ゴルゴタへひかれて行くクリストが、彼の家の戸口に立止つて、暫く息

を入れようとした時、無情にも罵詈ばりを浴せかけた上で、散々ちよう打うち擲ちやくを加えさせした。その時負うたのが、「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしほうの帰るまで、待つて居れよ」と云う呪である。彼はこの後のち、パウロが洗礼を受けたのと同じアナニアスの洗礼を受けて、ヨセフと云う名を貰った。が、一度負った呪は、世界滅却の日が来るまで、解かれない。現に彼が、千七百二十一年六月二十二日、ムウニツヒまちの市に現れた事は、ホオルマイエルのタツシエン・ブウフの中に書いてある。――

これは近頃の事であるが、遠く文献さかのほを溯つても、彼に関する記録は、随所に発見される。その中で、最も古いのは、恐らくマシウ・パリスの編纂したセント・アルバンスの修道院の年代記に出

ている記事であろう。これによると、大アルメニアの大僧正が、セント・アルバンスを訪れた時に、通訳の騎士ナイトが大僧正はアルメニアで屢々しばしば「さまよえる猶太人」と食卓を共にした事があると云つたそうである。次いでは、フランドルの歴史家、フィリップ・ムスクが千二百四十二年に書いた、韻文いんぶんの年代記の中にも、同じような記事が見えている。だから十三世紀以前には、少くとも人の視聴そぼだを聳たしめる程度に、彼は欧羅巴ヨオロッパの地をさまよわなかつたらしい。所が、千五百五年になると、ボヘミアで、ココトと云う機織はたおりが、六十年以前にその祖父の埋めた財宝を彼の助けを借りて、発掘する事が出来た。そればかりではない。千五百四十七年には、シユレスウイツヒの僧正パウル・フォン・アイツエ

ンと云う男が、ハムブルグの教会で彼が祈祷をしているのに出遇った。それ以来、十八世紀の初期に至るまで、彼が南北両欧に亘わたつて、姿を現したと云う記録は、甚だ多い。最も明白な場合のみを挙げて見ても、千五百七十五年には、マドリッドに現れ、千五百九十九年には、ウインに現れ、千六百一年にはリウベック、レヴェル、クラカウの三ヶ所に現れた。ルドルフ・ボトレウスによれば、千六百四年頃には、パリに現れた事もあるらしい。それから、ナウムブルグやブラッセルを経て、ライプツィヒを訪れ、千六百五十八年には、スタンフォードのサムエル・ウオリスと云う肺病やみの男に、赤サルビアの葉を二枚に、ブラッドワート羊蹄の葉を一枚、ビール麦酒にまぜて飲むと、健康を恢復すると云う秘法を教えてや

ったそうである。次いで、前に云ったムウニツヒを過ぎて、再び英吉利イギリスに入り、ケムブリッジやオックスフォードの教授たちの質疑に答えた後、丁デンマアク抹スウエデンから瑞典スウエデンへ行つて、ついに踪跡そうせきがわからぬ。爾来、今日まで彼の消息は、杳ようとして

「さまよえる猶太人」とは如何なるものか、彼は過去において、如何なる歴史を持つているか、こう云う点に関しては、如によじよう上じやうで、その大略を明にし得た事と思う。が、それを伝えるのみが、決して自分の目的ではない。自分は、この伝説的な人物に関して、嘗て自分が懐いだいていた二つの疑問を挙げ、その疑問が先頃偶然自分の手で発見された古文書こもんじよによつて、二つながら解決された事

を公表したのである。そうして、その古文書の内容をも併せて、ここに公表したのである。まず、第一に自分の懐いていた、二つの疑問とは何であるか。――

第一の疑問は、全く事実上の問題である。「さまよえる猶太人」は、ほとんどあらゆる基^{キリスト}督教国に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡来した事がありはしないか。現代の日本は暫^おく措いても、十四世紀の後半において、日本の西南部は、大抵^{てんしゆきよ}天主教^うを奉じていた。デルブロオのビブリオテク・オリアンタアルを見ると、「さまよえる猶太人」は、十六世紀の初期に当つて、ファデイラの率いるアラビアの騎兵が、エルヴァンの市^{まち}を陥れた時に、その陣中に現れて、Allah akubar（神は大いなるかな）の

祈禱を、フアデイラと共にしたと云う事が書いてある。すでに彼は、「東方」にさえ、その足跡を止めている。大名と呼ばれた封建時代の貴族たちが、黄金の十字架くるすを胸に懸けて、パアテル・ノステルを口にした日本を、——貴族の夫人たちが、珊瑚さんごの念珠ねんじゆを爪繰つまぐつて、毘留善麻利耶びるぜんまりあの前に跪ひざまずいた日本を、その彼が訪れなかつたと云う筈はない。更に平凡な云い方をすれば、当時の日本人にも、すでに彼に関する伝説が、「ぎやまん」や羅面琴らべいかと同じように、輸入されていはしなかつたか——と、こう自分は疑つたのである。

第二の疑問は、第一の疑問に比べると、いささかその趣を異にしている。「さまよえる猶太人」は、イエス・クリストに非礼を

行つたために、永久に地上をさまよわなければならぬ運命を背負わせられた。が、クリストが十字架くるすにかけられた時に、彼を窘くるしめたものは、独りこの猶太人ばかりではない。あるものは、彼に荆棘いばらの冠かんむりを頂ただかせた。あるものは、彼に紫こころもの衣まとを纏まとわせた。またあるものはその十字架くるすの上に、I・N・R・Iの札はをうちつけた。石を投げ、唾つばを吐きかけたものに至つては、恐らく数えきれないほど多かつたのに違ひない。それが何故、彼ひとりクリストの呪のろいを負つたのであろう。あるいはこの「何故」には、どう云う解釈が与えられているのであろう。——これが、自分の第二の疑問であつた。

自分は、数年来この二つの疑問に対して、何等の手がかりをも

得ずに、空しく東西の古文書を渉獵こもんじよ しようりようしていた。が、「さまよえる猶太人」を取扱った文献の数は、非常に多い。自分がそれをことごとく読破すると云う事は、少くとも日本にいる限り、全く不可能な事である。そこで、自分はとうとう、この疑問も結局答えられる事がないのかと云う気になった。所が丁度そう云う絶望に陥りかかった去年の秋の事である。自分は最後の試みとして、りようひ両肥及び平戸天草ひらどあまくさの諸島を遍歴して、古文書の蒐集に従事した結果、偶然手に入れた文ぶん禄年間の MSS. 中から、ついに「さまよえる猶太人」に関する伝説を発見する事が出来た。その古文書の鑑定その他に関しては、今ここに叙説じよせつしている暇いとまがない。ただそれは、当時の天主教徒の一人が伝聞した所を、そのまま当

時の口語で書き留めて置いた簡単な覚え書だと云う事を書いてさえ置けば十分である。

この覚え書によると、「さまよえる猶太人」は、平戸ひらどから九州の本土へ渡る船の中で、フランシス・ザヴィエルと邂逅かいこうした。その時、ザヴィエルは、「シメオン伊留満いるまん一人を御伴おともに召され」ていたが、そのシメオンの口から、当時の容子ようすが信徒の間へ伝えられ、それがまた次第に諸方へひろまって、ついには何十年か後に、この記録の筆者の耳へもはいるような事になったのである。もし筆者の言をそのまま信用すれば「ふらんしす上しようにん人さまよえるゆだやびとと問答の事」は、当時の天主教徒間に有名な物語の一つとして、しばしば説教の材料にもなったらしい。自分は、

今この覚え書の内容を大体に亘わたつて、紹介すると共に、二三、原文を引用して、上記の疑問の氷解した喜びを、読者とひとしく味わいたいと思う。――

第一に、記録はその船が「土産みやげの果物くだものくさぐさを積たんでいた事を語っている。だから季節は恐らく秋であろう。これは、後段に、無花果いちじゆく云々の記事が見えるのに徴しても、明である。それから乗合はほかにはなかったらしい。時刻は、丁度昼であった。――筆者は本文へはいる前に、これだけの事を書いている。従つてもし読者が当時の状景を彷彿ほうふつしようと思ふなら、記録に残っている、これだけの箇条から、魚の鱗うろこのように眩まばゆく日の光を照り返している海面と、船に積んだ無花果いちじゆくや柘榴ざくろの実と、そうして

その中に坐りながら、熱心に話し合っている三人の紅毛人こうもうじんとを、読者自身の想像に描いて見るよりほかはない。何故と云えば、それらを活いき々いきと描写する事は、単なる一学究たる自分にとって、到底不可能な事だからである。

が、もし読者がそれに多少の困難を感じるとすれば、ペックがその著「ヒストリイ・オブ・スタンフォード」の中で書いている「さまよえる猶太人」の服装を、大体ここに紹介するのも、読者の想像を助ける上において、あるいは幾分の効果があるかも知れない。ペックはこう云っている。「彼の上衣うわぎは紫である。そうして腰まで、ボタンがかかっている。ズボンも同じ色で、やはり見た所古くはないらしい。靴下はまっ白であるが、リンネルか、毛

織りか、見当がつかなかった。それから髯ひげも髪も、両方とも白い手には白い杖を持っていた。」——これは、前に書いた肺病やみのサムエル・ウオリスが、親しく目撃した所を、ペックが記録して置いたのである。だから、フランス・ザヴィエルが遇あつた時も、彼は恐らくこれに類した服装をしていたのに違いない。

そこで、それがどうして、「さまよえる猶太人」だとわかつたかと云うと、「上しやうにん人の祈祷された時、その和郎わろうも恭しく祈祷

した」ので、フランスの方から話をしかけたのだそうである。

所が、話して見ると、どうも普通の人間ではない。話すことと云い、話し振りおのずかと云い、その頃東洋へ浮浪して来た冒険家や旅行者とは、自ら容子がちがっている。「天竺てんじく南蛮の今昔こんじやくを、掌たなごころ

にても指すゆびさように「指したので、「シメオン伊留満いるまんはもとより、

しようにん

上 人 御自身さえ舌を捲かれたそうでござる。」そこで、「そ

なたは何処のものじゃと御訊おたずねあつたれば、一いっしょふじゆう所不住のゆだ

やびと」と答えた。が、上人も始めは多少、この男の真偽を疑い

かけていたのであろう。「当来はらいの波羅韋僧そうにかけても、誓い申す

べきや。」と云つたら、相手が「誓い申すとの事故、それより上

人も打ちとけて、種々くさくさ問答せられたげじゃ。」と書いてあるが、

その問答を見ると、最初の部分は、ただ昔あつた事実を尋ねただけで、宗教上の問題には、ほとんど一つも触れていない。

それがウルスラ上人と一万一千の童貞どうてい少女しょうじよが、「奉公の

死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界じょうざいがいの話を経て、次

第に今日の使徒行伝中の話となり、進んでは、ついに御主おんあるじ

耶蘇エス・クリスト基督が、ゴルゴダで十字架くるすを負った時の話になった。丁度

この話へ移る前に、上人が積荷の無花果いちじゆくを水夫に分けて貰つて、

「さまよえる猶太人」と一しよに、食つたと云う記事がある。前

に季節の事に言及した時に引いたから、ここに書いて置くが、勿

論大した意味がある訳ではない。——さて、その問答を見ると、

大体下しものような具合である。

上人しょうにん「御主おんあるじ御受難みぎりの砌は、エルサレムにいられたか。」

「さまよえる猶太人」如何いかにも、眼まのあたりに御受難おんの御有様

を拝あがしました。元来それがしは、よせふと申して、えるされむに

住む靴くつ匠しょうでござつたが、当日は御主おんあるじがぴらと殿どのの裁判さばきを

ない、ヨセフの心にさえ異常な印象を与えた。彼の言葉を借りれば、「それがしも、その頃やはり御主おんあるじの眼を見る度に、何となくなつかしい気が起つたものでござる。大方おおかた死んだ兄と、よう似た眼をしていられたせいでもござろう。」

その中うちにクリストは、埃と汗とにまみれながら、折から通りかかった彼の戸口に足を止とどめて、暫く息を休めようとした。そこには、鞞なめしがわ皮の帯をしめて、わざと爪を長くしたパリサイの徒もいた事であろうし、髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たちもいた事であろう。あるいはまた、羅馬ロオマの兵卒たちの持っている楯たてが、右からも左からも、眩まばゆく暑い日の光を照りかえしていたかも知れない。が、記録にはただ、「多くの人々」と書

いてある。そうして、ヨセフは、その「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せとうござったによつて、」クリストの足を止めたのを見ると、片手に子供を抱きながら、片手に「人の子」の肩を捕えて、ことさらに荒々しくこずきまわした。——「やがては、ゆるりと磔柱はりきにかつて、休まるる体からだじやなど悪あつこ口し、あまつさえ手をあげて、打ち擲ちやくさえしたものでござる。」

すると、クリストは、静に頭をあげて、叱るようにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似ていると思つた眼で、嚴おごそかにじつと見たのである。「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ。」——クリストの眼を見ると共に、彼はこう云う語ことばが、熱風よりもはげしく、刹那に彼の心へ

焼けつくような気もちがした。クリストが、実際こう云ったかどうか、それは彼自身にも、はつきりわからない。が、ヨセフは、「この呪のろいが心耳しんじにとどまって、いても立つても居られぬような氣になつたのであろう。あげた手おのずかが自ら垂れ、心頭にあつた憎しみが自ら消えると、彼は、子供を抱いたまま、思わず往来ひざまに跪いて、爪を剥はがしているクリストの足に、恐る恐る唇をふれようとした。が、もう遅い。クリストは、兵卒たちに追いつてられて、すでに五六歩彼の戸口を離れている。ヨセフは、茫然として、ややともすると群集にまぎれようとする 御おんあるじ主の紫の衣を見送つた。そうして、それと共に、云いようなない後悔の念が、心の底から動いて来るのを意識した。しかし、誰一人彼に同情してくれ

るものはない。彼の妻や子でさえも、彼のこの所作しよさを、やはり荊い
ばら棘の冠をかぶらせるのと同様、クリストに対する嘲ちようろう弄ろうだと解
 釈した。そして往来の人々が、いよいよ面白そうに笑い興じたの
 は、無理もない話である。——石をも焦がすようなエルサレムの
 日の光の中に、濛々と立騰たちのぼる砂塵さじんをあびせて、ヨセフは眼に涙
 を浮べながら、腕の子供をいつか妻に抱だきとられてしまったのも
 忘れて、いつまでも跪ひざまずいたまま、動かなかつた。……「されば恐
 らく、えるされむは広しと云え、御おんあるじ主はすかしを辱めた罪を知つてい
 るものは、それがしひとりでござろう。罪を知ればこそ、呪もか
 かったのでござる。罪を罪とも思わぬものに、天の罰が下ろうよ
 うはござらぬ。云わば、御主はりきを磔柱はりきにかけた罪は、それがしひと

りが負うたようなものでござる。但し罰をうければこそ、あがな贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主のきゆうばつ救拔を蒙るのも、それがしひとりにはきわまりました。罪を罪と知るものには、総じて罰とあがな贖いとが、ひとつに天から下るものでござる。」——「さまよえる猶太人」は、記録の最後で、こう自分の第二の疑問に答えている。この答の当否を穿鑿せんさくする必要は、暫くない。ともかくも答を得たと云う事が、それだけです。自分に自分を満足させてくれるからである。

「さまよえる猶太人」に関して、自分の疑問に対する答を、東西の古文書こもんじよの中に発見した人があれば、自分は切せつに、その人が自分のために高教を吝おしまない事を希望する。また自分としても、如

上の記述に関する引用書目を挙げて、いささかこの小論文の体裁を完全にしたいのであるが、生憎あいにくそうするだけの余白が残っていない。自分はただここに、「さまよえる猶太人」の伝記の起源が、馬太伝またいでんの第十六章二十八節と馬可伝まこでんの第九章一節とにあると云うベリンググツドの説を挙げて、一先ずペンとどを止める事しようと思う。

(大正六年五月十日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さまよえる猶太人

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>